5 Q & A

Q1 ペットフード安全法の対象となる「愛がん動物用飼料」とはどのようなものですか。対象動物は何ですか。

A 愛がん動物用飼料とは、犬・猫の栄養に供することを目的として使用されるものと定義されています。そのため、犬や猫が口にする可能性のあるものであっても、おもちゃ、愛がん動物用飼料の容器等は、栄養に供するものではないことから、ペットフード安全法の対象となりません。香り付けや遊具として使用することを目的としたまたたび製品や猫が飲み込んでしまった毛と一緒に吐き出すことを目的としている猫草も対象になりません。

Q2 普段購入しているペットフードについて、いつもと色や臭いが違うようでした。どうしたら良いでしょうか。

A ペットフードに異常があると思った場合、犬や猫に与えることをやめましょう。その上で、ペットフードのパッケージ等に記載されている事業者に確認することをお勧めします。（P.10～11）

Q3 ペットフードを食べた後に、嘔吐や元気消失など体調不良が認められた場合、どうしたら良いでしょうか。

A まずは、かかりつけの獣医師に診てもらいましょう。

与えたペットフードが原因かどうかについては、診察の結果に基づいて、獣医師から助言を得られる可能性もありますので、ペットフードによる健康被害の可能性がある旨（できれば製品を持参、ペットフードを与えた時の様子など）も獣医師に説明するようにしましょう。

その上で、ペットフードのパッケージ等に記載されている事業者に確認することをお勧めします。（同一製品で同様の健康被害が発生しているかどうかも確認しましょう。）（P.10～11）

また、地方環境事務所の窓口においても問い合わせやご相談を受け付けています。（P.21）

Q4 現在のペットの体重に合わせた目安の量のペットフードを与えていたらペットが肥満になってしまいました。どのように与えるのが正しいのでしょうか。

A

ペットフードを与える際の目安の量は犬や猫の理想体重を元に計算されています。そのため、現在の犬や猫の体重に合わせてペットフードを与えると、多すぎたり、少なすぎたりする場合があります。

犬や猫の理想体重は個体や骨格によっても異なるため、かかりつけの獣医師に相談して、ペットの理想体重を把握しましょう。

また、表示されている給与量は目安であり、犬や猫が必要とする栄養の量は季節や運動量、性別、避妊去勢の有無などによっても変化します。

定期的に体重をはかり、犬や猫の理想的な体型を維持出来るように心がけましょう。

Q5 ペットが高齢になり、寝ていることが多くなりました。食事はどのようなことに気をつけたら良いでしょうか。

A

一般的に8～10歳くらいから中高齢期に入り、人と同様に高齢になると犬や猫も内臓の働きや運動機能が低下するとともにエネルギー要求量も減ってきます。そのため高齢期専用のペットフード（低エネルギー、低脂肪、良質なタンパク質のペットフード）を与えるようにしましょう。さらに、嗅覚や味覚が衰え、食欲が低下することも多いため、フードを人肌に温めたり、お湯でふやかしたり、塩味のついていないチキンスープをかけて食欲が落ちないように工夫しましょう。

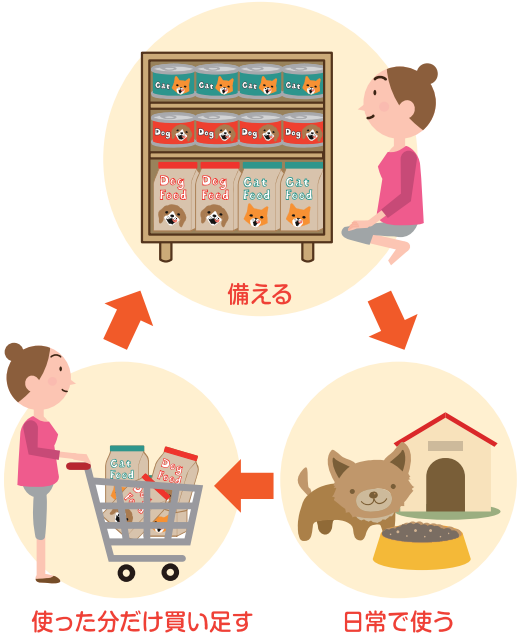
また、室内でも良いので動く（歩く）ことを促して筋肉の維持に努めることなども必要な可能性がありますので、獣医師に相談してみましょう。

Q6 大規模災害に備えて、ペットフードの備蓄はどれくらい必要でしょうか。

A

災害時であってもペットの安全と健康を守るのは飼い主の責任です。平常時からペットフードや水については飼い主の責任で少なくとも5日分、できれば7日分を用意しておくようにしましょう。特に、療法食を与えている場合には獣医師と事前に相談し対応を考えておきましょう。

また、例えば人用の災害対策として、普段から少し多めに食料を買っておき、使った食料分だけ新しく買い足していくことで、常に一定量の食料を家に備蓄しておく「ローリングストック法」という方法があります。



Q7 犬と猫を一緒に飼育しているのですが、犬が猫用（猫が犬用）のフードを食べてしまいます。犬が猫用のフードを、猫が犬用のフードを食べてしまっても大丈夫でしょうか？また、これを防ぐ方法はありますか？

A

元来、犬と猫は異なった動物であり、必要とする栄養素は違います。たまたま少量を食べてしまう分には問題が生じることはありませんが、長期的には、特定の栄養素について過剰、不足が生じて健康上の問題を引き起こす可能性があります。（P.3）

なお、犬用ペットフードには保湿性を向上させるため、プロピレングリコールが添加されているものがありますが、その程度の添加量でも猫には悪影響を及ぼす可能性があります。（ペットフード安全法では、プロピレングリコールは猫用のペットフードに用いてはいけません。）

食事の時間や場所を分けるなどの工夫をし、犬・猫専用のフードを間違いなく与えるようにしましょう。

Q8 ライフステージごとに栄養の必要量が異なるため、ライフステージにあったフードを与えなければいけないと教えられましたが、ライフステージが異なる犬あるいは猫を数頭飼育している場合に、どのように管理すれば良いでしょうか？

A

例えば、ドライフードでは成長期用は成犬・成猫用のフードよりも同じ食事量でも多くのエネルギーや成長のために必要な栄養（たんぱく質、カルシウムなど）が摂取できるように作られています。成犬・成猫用のフードを幼犬・幼猫に与えると栄養不足になりますし、逆に幼犬・幼猫用のフードを成犬・成猫に与えるとエネルギーが過剰となり肥満になります。このため、ライフステージごとのフードを食べさせることは、とても重要です。

複数頭を飼育する場合、例えば、フードを与える場所を変える。（子犬はケージの中でフードを与え、食べ終わったら、すぐに片づける）時間をずらすなどの工夫が必要です。

Q9 ペットの健康のために、食事の他にサプリメントを与えたいのですがどんなものが良いですか？また、人用のサプリメントを与えてもよいですか？

A

サプリメントは栄養補助食と言われ、ビタミンやミネラルなどの特定の栄養成分を補充するために与えるものです。

本来、総合栄養食を与えている場合は栄養分の不足はおこりにくいと思われます。また、栄養素の不足しがちな、成長期や授乳期にはライフステージに合ったフードを選ぶことで、必要な栄養を補うことができます。

しかし、手作りの食事を与えている時は栄養素の不足が起こりやすいため、栄養成分を計算した上で与えるようにしましょう。

健康補助食品として、ダイエット用サプリメントなどを用いる場合は、十分に安全性が確認されたものを使うことをおすすめします。また、複数の健康補助食品を使用する場合には、悪影響が出ることがあるので獣医師に相談しましょう。

また、人用のサプリメントは人に安全性が確認されていても、犬や猫には毒性を示すサプリメントもあります。必ず犬や猫で安全性が確認されているものを与えるようにしましょう。